

“Ten minutes into the walk” という構文の 語彙概念構造

Lexical Conceptual Structure for a Construction like *Ten minutes into the walk*

松山 哲也

MATSUYAMA Tetsuya

キーワード：漸進的変化，閉鎖スケール，移動範囲，完結アスペクト，度量句

1. はじめに

英語には，(1a-c)のように，ten minutes 等の度量句 (Measure Phrase, MP) が前置詞 into の前に生起し，事象名詞が後続するような表現がある¹。

- (1) a. We are ten minutes into the walk to the Hide Park Corner.²
b. We're eight hours into the journey with 20 to go, but small talk is wearing thin. (BNC)
c. Willett is now about two years into his five-year plan and the first tangible results are beginning to emerge. (WB)

(1a-c)の度量句は，ある物体が名詞の表す「事象」の中に入ってどの程度進んだかを表わしている。例えば，(1b)の we're eight hours into the journey は，主語 we が「旅 (the journey)」が表わす「事象」の中に入って8時間で移動した範囲を表わしている。よって，「我々は，旅を始めて8時間になる」という意味になる。また(1)の表現は，形式的には，MP (度量句) が P (前置詞) の前に生起して NP (事象名詞) が続くという連鎖「MP + P + NP」をしている。この連鎖は，中間経路の前置詞 (down, along, across) の場合によく観られるものである。しかし中間経路の場合，度量句は任意であるが((2a))，into の場合は義務的である((2b))³。

- (2) a. We are (two miles) {down the road/over the mountain}.
b. We are *(twelve minutes) into the walk to the Hide Park Corner.

¹ 「度量句」は，Jackendoff(1977)による。

² 本稿の例文中の下線はすべて筆者によるものである。

³ 起点の from 句の場合も度量句は義務的である (Bennett(1975)，田中・松本 (1997))。しかし from は事象名詞を選択しない点で「MP into NP」構文とは異なる。この点については今後の課題としたい。

(i) We are*(ten minutes) from the station.

以下, (1a-c)のような度量句が義務的に要求される表現を「MP into NP」構文と呼ぶことにする。⁴

「MP into NP」構文は, 構文としての定着度が現代英語において高いようである。例えば, この構文の度量句の典型的な名詞は時間的なものであるが, (3a-d)のように普通の名詞である事例もある。

- (3) a. he was no more than one or two measures into the song when a loud whisper was heard from the wings. "This is terrible!" (WB)
 b. That psychological moment arrived just two words into my speech. (WB)
 c. John is a hundred pages into the book.
 d. She was just two songs into the show when the audience fell into a deep sleep.

また興味深いことに, 「MP into NP」構文は, (4a, b)のように「主語」として用いられることも, (5a, b)のように等位項として「節」と同じ働きをすることも可能である。

- (4) a., but ten years into a childless marriage can begin to seem to be onerous. (WB)
 b. A further reason is that it is commonly found that eighteen months into recovery is a particular period of disillusion and difficulty. (BNC)
 (5) a. An hour into conversation and she is just starting to warm up. (BNC)
 b. Minutes into the flight and he's already wittering on about how high we're flying. (WB)

このような事実を考慮すると, 「MP into NP」構文は, 現代英語において生産性が高く, 「構文」として定着しているものと思われる⁵。しかし筆者の知る限り, この構文について, 詳しい記述や理論的な説明は今までなされてきていないようである⁶。

本稿の目的は2つある。第1の目的は, 「MP into NP」構文の意味特徴を記述し, この構文の本

⁴ (1a-c)のintoは抽象的な時間関係を表わしているが, (ia, b)のようにintoが空間名詞を目的語に取って物理的な空間関係を表わす事例もある。

(i) a. They camped five miles into the forest. (Huddleston and Pullum(2002:683))

b. Wearing breathing apparatus they were a few feet into the building when overhead piping collapsed, trapping them. (BNC)

松山(2007)では, 前者は後者から「空間」を「時間」に見立てた「メタファー」によって関連付けられると分析している。本稿では, 時間関係のintoを伴った「MP into NP」の事例だけを分析の対象とする。

⁵ 本稿では, 「構文」の定義としてGoldberg (1995:4)に従う。この定義からすると, 「MP into NP」の度量句が義務的であるということは, この表現のどの構成要素からも予測できない「特異性」であるといえる。したがって, 「MP into NP」は, (i)の定義の意味では「構文」ということになる。

(i) "C is a CONSTRUCTION iffdef C is a form-meaning pair $\langle F_i, S_i \rangle$ such that some aspect of F_i or some aspect of S_i is not strictly predictable from C's component parts or from other previously established constructions."

⁶ 先駆的な記述として滝沢 (2007:191-192) がある。

質を理解することである。具体的には、「MP into NP」構文は、ある物体が「事象」の中に位置する「場所」を表わし、度量句が恣意的に限界点を設定できる「移動範囲」を表していることを明らかにする。第2の目的は、影山（2008）で提案された「漸進的変化」のLCSを援用して、当該構文の特徴を説明できる語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure, LCS）を提案することである。具体的には、「MP into NP」構文のLCSには、「閉鎖スケール」をもった「漸進的変化」が含まれるものと分析していく。

2. 「MP into NP」構文の意味特徴

本節では、「MP into NP」構文がもつ意味特徴——(i) 静的位置関係を表わすこと、(ii) 度量句が「移動範囲」を表わすこと——を明らかにする。

2.1. 「場所句」

Jackendoff (1991:31) は、「空間 (space)」を方向性 (directionality) の有無の観点から「場所 (place)」と「経路 (path)」の2つの概念範疇に峻別している。「場所」は、固有の方向性が欠如した空間（静的位置）を、「経路」は、固有の方向性がある空間を表す。この区別の観点からは、「MP into NP」構文は「経路」を表わすと考えるのが自然であるように思える。なぜなら into は固有の方向性をもっているからである。しかし、(6a)の「MP into NP」は、「場所」の前置詞句で(6b)のようにパラフレーズできることを考慮すると、方向性のある経路と考えるのは妥当でないと思われる。

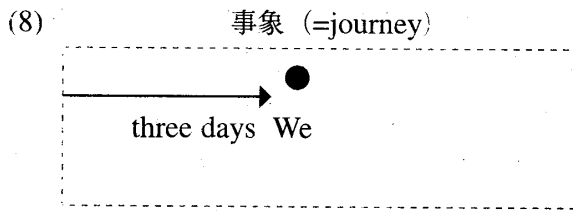
- (6) a. We are three days into the journey.
b. We are on the third day of the journey.

この事実から、「MP into NP」構文は、静的位置関係を表わす「場所」であるかと推測される。この点は(7)からも明らかである。

- (7) At 11.11 pm, seven minutes into the journey to Universite Laval Hospital, Kordic's final fight, this time for life, was over. (WB)

(7)では、seven minutes into the journey が、時間軸上の一点を表わす前置詞句 At 11.11pm と同格の関係になって、前者が後者の内容を敷衍している。同格される要素は、お互いに意味内容が同じである。したがって、seven minutes into the journey は、静的位置を表わしていると考えられる。

この静的位置を●で表記すると、例えば we are three days into the journey の意味は、(8)のように図示される。



(8)から明らかなように、「MP into NP」構文は、ある物体が「事象」の中に位置する「場所」を表わしている⁷。「場所」は、典型的には物理的な位置関係を表わすが、ここでは、意味場 (semantic fields) の素性の違いとして抽象的な時間関係にも当てはまると考える。つまり、様々な意味場の共通の鑄型として「場所」の概念範疇を仮定する。

「場所」は、大まかに、物体が存在するという状態が成立する「場所」と、ある出来事が起こる「場所」の2つのタイプがある (Jackendoff (1990))。日本語は、前者を「に」格で、後者を「で」格によって区別する ((9a, b))。

- (9) a. 机の上 {に/*で} 携帯電話がある。
 b. 机の上 {で/*に} 携帯電話が {鳴った/振動した/爆発した}。

(9a)の「に」格の場所句は、ある物が存在する位置を規定し、存在動詞「ある」の項として機能しているが、(9b)の「で」格の場所句は、出来事の生起する場面を設定し、付加詞的に働いている。つまり、日本語では、場所句が項か付加詞として働いているかは、形態的な格表示によって区別される。

一方、英語ではこのような形態的な区別は存在しない。場所句が項か付加詞であるかは、場所格倒置 (locative inversion) の適用可能性と関係する (小野(2005:190))。付加詞的な場所句は、倒置が不可能だが((10a-c))、項の場所句は、倒置が可能である((11a-c))。

- (10) a. *Among the guests was knitting my friend Rose.
 b. *Onto the ground had spit a few sailors.
 c. *On the corner was drinking a woman. (Bresnan 1994: 78)
- (11) a. Among the guests was sitting my friend Rose.
 b. Onto the ground had fallen a few leaves.
 c. On the corner was standing a woman. (Bresnan 1994: 78)

⁷ この点は、下記のような到達経路 (access path) 表現と共通した特徴である。この表現の特徴については、松本 (1997) や Talmy (1996) を参照。

- (i) a. The firehouse is two miles down the road from here. (Jackendoff (1983:167))
 b. The post office is ten minutes over the hill from here.

この点を念頭に(12a, b)を考えてみよう。(12b)では「MP into NP」である about 30 minutes into the walk が場所格倒置の適用を受けて文頭に移動している。

- (12) a. The statue of liberty is about 30 minutes into the walk.
b. About 30 minutes into the walk is the statue of liberty.

このことは、「MP into NP」が be 動詞の項として働き、「状態の場所」として解釈されることを示している。しかし、「MP into NP」は、出来事の生起する状況を導入するような付加詞として働くこともある((13a-c))。

- (13) a. Seven or eight years into the experiment, this cannot, as yet, be verified. (BNC)
b. Three days into the journey, John stopped at a small village.
c. Seven minutes into the game, Vietnam took a 1-0 lead on an own goal in front of a near-capacity crowd of 40,000. (Asahi Weekly July 22, 2007 (p.3))

それでは、項の場合と付加詞の場合とはどのように異なるのであろうか。前者は文に生起する動詞に制限があるようだ。(1a-c)や(3a, b, d)の実例を見る限り「存在」の be 動詞が典型的である⁸。一方、付加詞の場合は be 動詞以外の動詞も可能であるから、文に生起する動詞に制限がないようである。以下では、特に断りが無い限り、be 動詞の項となっている「MP into NP」構文に限って議論を進めていく。

さらに「MP into NP」構文が「場所」を表すことは、次の観察からも裏付けられる。この構文は、局面レベル述語 (stage-level predicate) と整合し((14a, b)), 個体レベル述語 (individual-level predicate) とは整合しない((15a-c))。

- (14) a. John was sick ten days into college life.
b. John was having a cold ten days into college life.
(15) a. *John had a gift for music ten days into college life.
b. *John was left-handed ten days into college life.
c. *John was intelligent ten days into college life.

個体レベル述語は、主語に内在化された恒久的な状態を表わすので、アスペクト的には時間軸上の

⁸ 「MP into NP」構文に現れる動詞が存在動詞に限られる可能性は、小野尚之先生（東北大学）にご指摘頂いた。たしかに、項の「MP into NP」は be 動詞とともに典型的に現れるので、「場所句」を必要とする「存在の動詞 (verbs of existence)」に限られるかもしれない (Levin (1993:92))。動詞制限の問題については、まだ調査中であるので、ここではこれ以上言及しない。

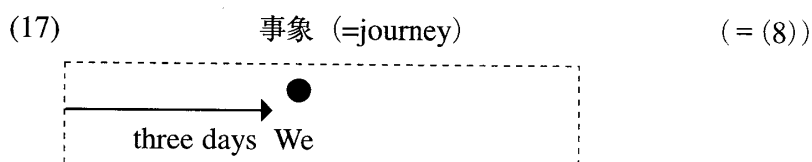
一点を表わす副詞句とは共起できない((16))。

(16) *John {had a gift for music / was left-handed / was intelligent} at that time.

従って、(15)の非文法性は、個体レベル述語の恒久性が「MP into NP」が表わす「静的位置」と意味的に整合しないことに求められる。

2.2. 「移動範囲」

1節で言及したように、「MP into NP」の度量句は、ある物体が「事象」の中にどの程度進んだかを表わしている。例えば we are three days into the journey は、(17)のように、we が「旅」という事象の中に入り込んで3日で進んだ範囲を伝えている。



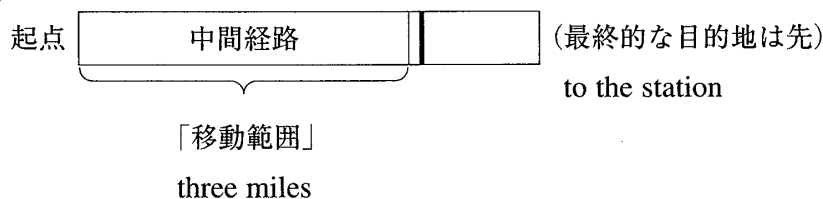
すると、この度量句は、She walked three miles の距離表現 (three miles) と同じように「移動範囲」を表わしていると考えてもよさそうである。本節では、この点を裏付ける証拠をいくつか提示する。その前に影山 (2008) に基づいて「移動範囲」という概念について説明しておこう。

「移動範囲」は、物体が経路上で当面移動した範囲のことである。例えば、John walked three miles では、John が歩いて移動した距離 (3マイル) が「移動範囲」となる。Jackendoff (1996) が指摘しているように、「移動範囲」を表わす度量句は、着点句と同じように限界点を設定できる ((18a, b))

- (18) a. John walked three miles {in/*for an hour}.
- b. John walked to the station {in/*for an hour}.

しかし着点句の限界点は、移動の最終的な終結を示すが、度量句の限界点は移動の最終的な終結を示すのではない。(18a)では、「歩く」という行為が最終的には終結しておらず、最終的な目的地はまだ先にある。一方、(18b)では、「歩く」という行為が駅に到着して終結してこれ以上進まないことを示す。この点は次の(19)のように図示される。

(19)



「移動範囲」という概念を明確にしたので、以下、「MP into NP」の度量句が「移動範囲」を表わしている証拠を提示していく。1つ目の証拠は、how far 疑問文と関係する。three miles のような「移動範囲」は、how long 疑問文ではなく how far 疑問文で尋ねるのが一般的である (Huddleston & Pullum (2002 : 690))。例えば (20a) の three miles は、how far 疑問文 ((20b)) の答えになるが、how long 疑問文 ((20c)) の答えとはならない。

- (20) a. She walked three miles.
 b. How far did she walk ?
 c. How long did she walk ?⁹

同様のことは、「MP into NP」でも成り立つ。(21a) の three days は、how long ではなく how far を用いて訊ねなければならない ((21b, c))。(22a-c) についても同様である。

- (21) a. John was three days into the journey.
 b. *How long into the journey was John?
 c. How far into the journey was John?
 (22) a. John was two hours into the walk.
 b. *How long into walk was John?
 c. How far into the walk was John?

(20) と (21-22) の平行性から、度量句は、中間経路上の距離表現と同様に「移動範囲」を表わしていることが裏付けられる。

さらに、度量句が「移動範囲」を示す証拠を提示する。上記で見たように、「移動範囲」の距離表現は、着点句と同じように、動詞の表す事象に限界点を設定する。もし度量句が「移動範囲」を表わすならば、「MP into NP」全体の事象は完結アスペクトを担うはずである。なぜなら「移動範囲」は、限界点を事象に加えるからである。この予測は、次の事実から支持される。Huddleston and Pullum (2002 : 700) によると、when 節の事象が主節の事象と同時に起きたと解釈される場

⁹ (20c) は for two hours のような「継続時間」を尋ねるのが一般的である。

合, when 節は時間軸上の一点 (point) を表わし, 主節の事象は完結アスペクトを担うという ((23))。

(23) When the clock struck twelve, the bomb exploded.

同様に(24a)では, 「MP into NP」を含む主節の事象が, when 節の事象と同時に起きたと解釈される。つまり, 従属節の when 節は時間軸上の一点 (point) を表わし, 主節の「MP into NP」の事象が完結アスペクトをもつ。一方, 継続的な事象を表す while 節は「MP into NP」構文とは共起できない((24b))。(24b)の非容認性の原因は, 「MP into NP」構文の完結アスペクトが while 節が表す継続性 (未完結アスペクト) と意味的に整合しないことにある。

- (24) a. When it started to rain, they were 30 minutes into the walk to Hide Park Corner.
b. *While it was raining, they were 30 minutes into the walk to Hide Park Corner.

2.3. まとめ

ここまでの観察から, 「MP into NP」構文について(25a, b)のような記述的一般化が得られる。

- (25) a. 「MP into NP」構文は, 全体として「場所」を表す。
b. 「MP into NP」構文の度量句は, 「移動範囲」を表わし限界点を設定する。

次節では, 影山 (2008) で提案された「漸進的変化」の LCS を援用しながら, (25a, b) の意味特徴を説明することができるような LCS を「MP into NP」構文に設定する。

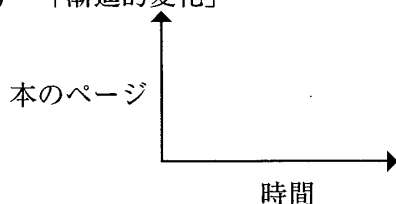
3. 「MP into NP」構文の LCS

3.1. 提案

本節の提案は, 「MP into NP」構文の LCS に「漸進的変化」の概念が含まれているということである。その前に, 影山 (2008) をもとに「漸進的変化」について若干の説明を加えておきたい。

「漸進的変化」とは, ごく大まかに言えば, 時間の経過とともにある物の量に増減の変化が見られることである。例えば, read a book のような状態変化の場合, 時間の経過とともに本のページが読まれて行く様子が見てとれる (Dowty(1991))。比喩的に言えば, 時間が経過するにつれて次第に本のページが消化されて行くのである。これは(26)のように図示される。

(26) 「漸進的变化」



「漸進的变化」は、ある物体が経路上を移動していく事象についても当てはまる (Jackendoff (1996))。例えば、The cart rolled down the hill では、時間の推移とともに荷車の相対的位置が変化していることが読み取れる。影山 (2008: 254) は、スケール構造を援用して「漸進的变化」の LCS を提案している。(27)のように「漸進的变化」を経路上に存在する地点 p の無数の連続であると仮定する¹⁰。

(27) []_y MOVE [Route $p_1 < p_2 < p_3 \dots$]

移動の意味述語 MOVE が補部として中間経路 [Route $p_1 < p_2 < p_3 \dots$] を取る。不等号 (<) は、右に行けば行くほど最終目的地に近づくことを示す。例えば、The cart rolled down the hill では、荷車が $p_1 < p_2 < p_3 \dots$ というように経路上に無数に存在する地点を漸次的に移動していくことになる。つまり、時間の経過とともに、荷車の相対的位置 ($p_1 < p_2 < p_3 \dots$) が推移していくことになる。

「漸進的变化」には、中間経路のスケール上に限界点があるものとないものがある。前者は、「閉鎖スケールをもつ漸進的变化」といい((28a)), 経路のスケール上に halfway などの副詞句で限界点 (p_n) を設定できる。例えば、John walked halfway down the hill では、halfway がジョンが歩いた道のりに限界点を加えている。一方、後者は「開放スケールをもつ漸進的变化」といい((28b)), 中間経路のスケール上に限界点がなく無限に継続するものである。無限を ∞ で表わす。

(28) a. 「閉鎖スケールをもつ漸進的变化」の LCS

[]_y MOVE [Route $p_1 < p_2 < \dots < p_n$]

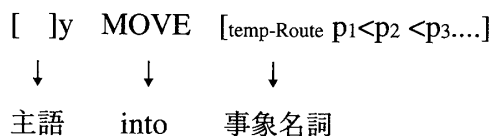
b. 「開放スケールをもつ漸進的变化」の LCS

[]_y MOVE [Route $p_1 < p_2 < \dots < \infty$]

上記の「漸進的变化」の LCS を踏まえると、「MP into NP」構文は、主語の相対的位置が時間の進展とともに変化すると考えることができる。つまり、我々は、(29)のように、「漸進的变化」としての中間経路 Route が「MP into NP」の LCS に含まれると分析する。

¹⁰ スケール構造については、Hay, Kennedy, and Levin (1999) を参照するのがよい。

(29) 「MP into NP」構文の LCS (暫定的)¹¹



前置詞 into は意味述語 MOVE で表される。この点は、影山・由本 (1997: 152) で指摘されているように、into が「動詞なしでも移動」を表わすことから支持される ((30))。また、into が選択する事象名詞は概念範疇 Route で示される。この場合の Route は、物理的空間でなく時間的空間であるので、意味場素性として temp を Route の左側に付けておく。いずれにせよ、時間と空間の共通した鑄型として Route を設定する。

- (30) He put on his black hat and looked up suddenly and then away deep into the woods.
(Flannery O'Connor, "A Good Man Is Hard to Find")

それでは、into が選択する事象名詞が中間経路的な概念であると考えられる証拠はあるのだろうか。筆者が、調査した限り、into に後続する事象名詞は、下記(31)のように、talk, climb, walk などの時間的に幅のある、アスペクト的には継続的 (durative) な名詞が多い。

- (31) a. only three or four minutes into her talk (BNC)
 b. five weeks into the climb (BNC)
 c. We are two minutes into the walk.
 d. We are two hours into the flight.
 e. four weeks into the investigation

実際「MP into NP」構文の into は、(32)のように、限界点のある瞬時的アスペクトを表す名詞 (explosion や arrival) を選択できない¹²。すなわち、into は、限界点のない継続的な事象を意味選択していると考えられる。したがって、into に後続する事象名詞を Route で表すことは不自然でない。

- (32) *Just a few seconds into the explosion / her arrival

¹¹ 記号 ↓ は、概念範疇と統語範疇との対応関係を表わすことを意図している。

¹² インフォーマントによれば、(32)の explosion の場合は、ある一定の時間のかかる大きな爆発、例えば、原爆の投下による爆発を想像すれば、容認可能となる。

3.2. 「MP into NP」構文の意味特徴の説明

3.1 節では、「MP into NP」構文の LCS に「漸進的変化」としての Route を含むと提案した。次にこの提案にしたがって、2 節で記述した「MP into NP」構文の 2 つの意味特徴——(i)「場所」を表わすこと、(ii)度量句が「移動範囲」を表わし限界点を設定すること——がどのように説明されるのかを見てみよう。先に(ii)の特徴から考える。

(ii) の特徴は、(33)のように、「MP into NP」構文の Route が閉鎖スケールになることで説明される。具体的に言えば、度量句が「移動範囲」を表わすことは、Route のスケールが限界点 (p_n) で閉じられるからである。つまり、「MP into NP」構文は、「閉鎖スケール」を伴う「漸進的変化」の LCS をもつと分析される。¹³

(33) 「MP into NP」構文の LCS

[y	MOVE	[temp-Route	p ₁ <p ₂ <....p _n]
↑	↑	↑	↑		
主語	into	事象名詞	度量句		

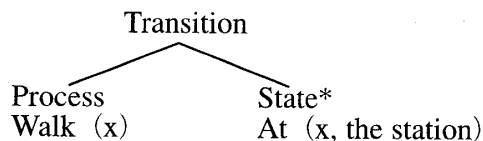
次に(i)の特徴を考えてみよう。「MP into NP」構文には、「場所」を意味する言語形式が存在しない。それにもかかわらず、なぜ「MP into NP」構文は「場所」を担うのであろうか。1 つの可能な解決策は、Goldberg (1995) の構文文法の路線にそって、「MP into NP」構文そのものが構文的意味として「場所」をもつと考えることである。しかしこの提案は、「MP into NP」構文の意味特徴を記述しただけで、事実の説明になっていない。

ここでは、Pustejovsky (1995) が提案した「事象の焦点化」(event headedness) の考えをスケール構造に応用する。Pustejovsky (1995) は、walked to the station で、walk の非完結アスペクトが着点句 to the station を伴うと完結アスペクトになるという、アスペクト強制の現象を「事象の焦点化」から説明している。事象構造の観点からは、walked to the station は、「歩く (walk)」という「過程 (process)」から、「駅にいる (to the station)」という「状態 (state)」への推移 (transition) を表わしている。この意味は、(34)のような「事象構造」で表される。

¹³ ここで、この構文の度量句が省略できない事実 (i) を思い出してほしい。この事実は、「MP into NP」の Route のスケールが義務的に閉鎖されることを示唆する。

(i) We are *(twelve minutes) into the walk to the Hide Park Corner. (= (2b))
 すると、次のような疑問が生じる。なぜ「MP into NP」構文は、LCS の中間経路のスケールが義務的に閉鎖されるのか。現段階では、この義務性が構文の特異性であるという答えしかもちあわせていない。この問題については、今後の課題としたい。

(34) walked to the station の事象構造



walked to the station は、process と state の2つの下位事象からなる。Pustejovsky は、アスペクト強制を説明するため、「推移」のような合成的な事象構造において、ある下位事象が焦点化 (foreground) されると、もう1つの下位事象が背景化 (background) されるという提案をする。焦点化された下位事象は、事象構造において主辞 (head) となって「解釈の焦点 (“focus” of the interpretation)」として働く。主辞となっている下位事象は、*が付けられる。つまり、(34)の事象構造では、state が主辞となって、walk の process が背景化される。その結果、walked to the station は、完結アスペクトの解釈が生れる。

ここでは、「事象の焦点化」の精神に従って、中間経路のスケール上の地点が主辞として焦点化されると提案したい。より具体的には、(35)のように、中間経路のスケールにおいて限界点 (p_n) が主辞となって他の地点が背景化されると考える¹⁴。主辞となった地点を*で表わす。この焦点化の結果、経路上の一点だけが際立つので、「MP into NP」構文は「場所」の意味を派生する¹⁵。



このように、「MP into NP」構文は、中間経路上の限界点 (p_n) が主辞となるスケール構造をもつならば、中間経路全体の軌跡を表す副詞句 all the way とは共起できないことが予測される。この予測は(36a, b)から支持される。

- (36) a. *John was all the way into the journey.
 (cf. John was halfway into the journey.)
 b. *They are all the way into the climb.
 (cf. They are halfway into the climb.)

¹⁴ 「焦点化」は、どのような場合に適用され、どのような場合に適用されないのかという問題がある。この問題について今後の課題としたい。

¹⁵ ここで提示した「焦点化」は、Taylor (1995)の到達経路表現の分析と共鳴する。Taylor によれば、到達経路表現は、全体と部分の「メトニミー」によって生まれるという。つまり、(ia)では経路全体が際立ち、到達経路表現の(ib)では経路の部分、つまり限界点が際立つというように、全体と部分の関係で捉える。

(i) a. He walked across the street. b. He lives across the street.
 すると、「焦点化」は「メトニミー」という認知能力を基盤としたものであるかもしれない。この点については、今後の課題としたい。

(36a, b)の非容認性は、経路全体の軌跡を表す *all the way* の意味が、限界点 (p_n) が主辞として焦点化されるという「MP into NP」構文の特徴と意味的に整合しないためである¹⁶。

4. 結 論

本稿では、従来の研究であまり扱われなかった *We are ten minutes into the walk* という構文に対して、語彙意味論の観点から記述的・理論的考察を加えた。記述的には、この構文が2つの意味特徴——(i)ある物体が事象の中で位置する「場所」を表わすこと、(ii)度量句が中間経路上の距離表現と同じ「移動範囲」を表わすこと——を指摘した。さらに理論的には、「MP into NP」構文の LCS に「漸進的変化」としての中間経路を想定した。この中間経路は限界点で閉鎖されたスケールで、さらにその限界点は焦点化されると分析した。ここで提示した分析が正しい路線に進むならば、「MP into NP」構文を理解する1つの道を提供すると思われる。

謝辞

本稿は、第135回日本言語学会(2007年11月24日、信州大学)で行われた研究発表(『intoを伴う到達経路表現について：構文文法的な視点から』)の一部を大幅に加筆・修正したものである。発表を聴講して頂いた方々、とりわけ、内容に関してご質問やコメントを頂いた小野尚之先生(東北大学)、松本曜先生(神戸大学)、山田進先生(聖心女子大学)に記して感謝申し上げます。そして、インフォーマンとして英語のデータについて貴重なコメントをして下さった Philip Adamek 先生(鹿児島県立短期大学)にも感謝申し上げます。いうまでもなく、文責は筆者にある。

参考文献

- Bennett, David (1975) *Spatial and Temporal Uses of English Prepositions : An Essay in Stratificational Semantics*, London: Longman.
- Bresnan, Joan. (1994) "Locative Inversion and the Architecture of Universal Grammar" *Language* 70:1 72-131.
- Dowty, David R. (1991) "Thematic Proto-roles and Argument Selection," *Language* 67:3 547-619.
- Goldberg, Adel. E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago: the University of Chicago Press.
- Hay, J., Kennedy, C. and B. Levin (1999) "Scalar Structure Underlies Telicity in "Degree Achievements," *The Proceedings of SALT 9*
- Huddleston, Rodney. D. and Geoffrey K. Pullum. (2002) *The Cambridge Grammar of the English*

¹⁶ Kageyama (2004:280)は、*all the way* が到達経路表現と共起できないことを指摘している。

(i) The post office is (**all the way*) across from the station.

この事実と、さらに「MP into NP」構文も *all the way* と共起できないことを考え合わせると、「MP into NP」構文は到達経路表現の一種であると考えられるかもしれない(松山(2007))。

- Language*, New York:Cambridge UP.
- Jackendoff, Ray (1977) *X'-Syntax: A Study of Phrase Structure*, Cambridge, Mass: MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1983) *Semantics and Cognition*, Cambridge, Mass : MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*, Cambridge, Mass : MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1991) "Parts and Boundaries," *Cognition* 41: 9-45.
- Jackendoff, Ray (1996) "The Proper Treatment of Measuring-out, Telicity, and Perhaps Even Quantification in English," *Natural Language and Linguistic Theory* 14 : 305-354.
- Kageyama, Taro (2004) "'All the Way' Adjuncts and the Syntax-Conceptual Structure Interface," *English Linguistics* 21: 2 265-293.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』研究社出版
- 影山太郎 (2008) 「語彙概念構造 (LCS) 入門」『レキシコ・フォーラム NO.4』(影山太郎 (編)) 239-264
ひつじ書房
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations*, University of Chicago Press.
- Matsumoto, Yo (1996) "How Abstract is Subjective Motion? A Comparison of Access Path Expressions and Coverage Path Expressions," In Adele Goldberg, ed., *Conceptual Structure, Discourse, and Language*, pp.359-373 Stanford: CSLI Publications.
- 松本曜 (1997) 「英語前置詞による『到達経路表現』－認知言語学的視点から」『英語青年』第142巻12号, 13-15.
- 松山哲也 (2007) 『into を伴う到達経路表現について：構文文法的な視点から』第135回日本言語学研究発表 (2007年11月24日, 信州大学)
- 小野尚之 (2005) 『日英語対照研究シリーズ9 生成語彙意味論』くろしお出版
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, Cambridge, Mass : MIT Press.
- Talmy, Leonard. (1996) "Fictive Motion in Language and 'Ception'," In Paul Bloom, Mary A. Peterson, Lynn Nadel, and Merrill F. Garrett, eds., *Language and Space*, pp.211-276 Cambridge, Mass : MIT Press.
- Taylor, John (1995) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory (Second Edition)*, New York : Oxford UP.
- 滝沢直宏 (2007) 『コーパスで一目瞭然 品詞別 本物の英語はこう使う!』小学館
- 田中茂範・松本曜 (1997) 『日英語比較選書6: 空間と移動の表現』研究社出版

コーパス

BNC : British National Corpus Online

WB : Word Bank Online

(2008年9月30日 受理)